

現代かな作家に問う、大字かなの今後の行方

杉本恵理

〈目次〉

はじめに

第一章 文字の大きさの変化に関して

第二章 大字かなの必然的要因について

第三章 現代かな作家に問う、大字かなの今後の行方

―アンケート調査結果―

おわりに

はじめに

今日、大字かなは多くの人々に親しまれ、展覧会は、多くの大字かなの作品で賑わっている。

かな作品には、卷子・帖などの、古筆の美を投影させたような細字作品、そして中字作品、そして大字作品があり、様々な形で展開されている。そのなかでも大字かな作品は、細字・中字とは別の魅力があるように思う。

ここでは、大字かなの今後の行方と題して考察を進めていく。まず最初に、文字の大きさの変化を平安時代から大字かな運動の近現代に至るまで、大まかではあるが、見ていこうと思う。そして、大字かなが必要とされるようになったその要因を、次の章で考察したい。

次に、現代の大字かなについてである。大字かなはこれまで、多くのかな作家

の先生方によって書かれてきた。そして、今後の大字かなは、現代かな作家の手にかかっているわけであるが、では、現在活躍されている若手かな作家の先生方は、大字かなについて、どのようにお考えであるのか。アンケート取らせていただいた。その調査の結果を紹介させていただき、そこから、大字かなの今後の行方を探ってみたいと思う。

第一章 文字の大きさの変化に関して

●平安時代の書

大字かなが登場したのは、今から約四百年遡り、安土桃山時代、近衛信尹（一五六五―一六一四）の手によってであると言われている。信尹は多くの大字かなを残しているが、この信尹が書いた大字かなより以前には、かなは大字で書かれることはなかったのか。この章では、そのことについて時代ごとに考察していきたい。

近衛信尹の大字かなが登場する以前の書蹟を調べてみると、かなは机上で書写されるものがあったと考えられる。かなの用途としては、書状・写本・懐紙・写経・文書などの書蹟が多数である。

では、平安時代にはどのような書蹟が多く残されているかというと、書状や目録、申文や詩巻、和歌集や写本、歌物語などが多い。

このように、現在残されている代表的なものを見てみると、机上で書写され、机上で読んだり鑑賞したりするものが多いことがわかる。そのため、文字も、実際に沿った小字であるのは当然であろう。

また、屏風や襖に書かれていたものをみても、そこには絵が施され、書は色紙形に書写され、上部に貼られているのである。もしくは、色紙の形に枠を書き、その中に書写されているのである。

その例としては、色紙形の下書きである小野道風（八九四―九六六）の屏風土

代があり、その他にも『古今和歌集』には、紀貫之（八七〇？—九四五？）が

もとやすのみこの七十の賀の、うしろの屏風によみてかきける。

春くればやどにまづさく梅の花君がちとせのかざしとぞみる

と、屏風に和歌を書いたことが記されている。『古今和歌集』には他に、素性法師や是則らも、屏風に和歌を書いたことが記されている。

『源氏物語』の“横笛”には、襖障子に色紙形が貼られているのを見ることが出来る。

このように、平安時代貴族たちは、屏風や襖障子に詩歌を書写し、絵の鑑賞と歌を作ることを楽しんで来たようである。

こうして、屏風に書が貼られ、生活空間の中に鑑賞のための書が存在していたことがわかるが、先にも述べた通りこれらの書は、近衛信尹が書いたような大字かなではなく小字で書写されている。

平安時代には、屏風に絵が書かれ、色紙形に書が書写されているのだが、屏風に直接大きな文字は書写されていないのである。

●鎌倉時代の書

では、かなのみでなく、漢字も同様に大字になるには、どのような過程を経たからなのか。それには、禅や、茶と鑑賞、また建築様式など、様々な背景が深く関わっているように思われる。

書、そのものが大きく書写されるようになったのは、鎌倉時代からであると思われる。それは、宋貿易が盛んになるとともに、宋より来朝する禅僧たちが増え、その禅僧たちが宋書道を輸入したことに関係しているようだ。

来朝した禅僧たちが、宋書風で墨蹟を幅に書写したからであろう。宋貿易で、大きな紙が輸入されることによって、幅に書写することが可能となったようであ

る。当時宋では、条幅に書写する新しい形式が現れていたため、宋僧たちがそれを日本に輸入したからだと言える。

墨蹟は、鎌倉から室町にかけて、禅僧たちのなかでますます盛んになったようである。また、その後元僧たちも来朝し、さらに盛んになった。

元僧である一山一寧（一二四七—一三二七）の「雪夜作」は、三〇・三センチ×八九・四センチの幅に書写されている。他にも多くの墨蹟が残されている。

漢字においては、鎌倉時代より文字が幅に書写されるようになって大きく書かれるようになるのであるが、かなにおいては、この頃はまだ小さいのである。しかしこの頃、貴族階級が衰え、貴族社会から武家社会への変化とともに、平安の高貴で雅である時代から、強く剛健なものを好む時代へと変化していくなかで、その時代背景を反映して文字も次第に大きく強いものへと変化していくようだ。

『高野切』などの平安の端整で美しい書から、平安時代後期にもなると、『香紙切』や『針切』など、自由で流麗な書が登場するようになり、鎌倉時代になると、もっと自由活潑な書へと変化していくのである。

鎌倉時代には歌会が多々催されていたため、懐紙が多く残されている。後鳥羽上皇が熊野詣の際に歌会をよく催したようで、和歌は盛んであった。その懐紙をみても、平安の文字と比べて、やはり文字は大きくなってきている。

さて、幅に書が書写されるようになったと述べたが、それを鑑賞するようになったのは、茶と建築様式の変化とが影響し、次第に文字は大きく書かれるようになるようだ。

こうして、文字の大きさは用途の変化や時代背景を反映するとともに、大きく変化したと考えられる。

●南北朝・室町時代の書

南北朝・室町時代の書は、鎌倉時代から増えてきた墨蹟が更に多く書かれるようになるようだ。そして鎌倉時代より更に禅宗が盛んになり、それを鑑賞するこ

とが行われるようになったのである。

鑑賞には、建築の変化と大きく関わっており、その変化によって盛んに行われるようになるのである。

室町時代には、書院造の家が建てられるようになって、平安時代のように床や机上で鑑賞するのではなく、鑑賞する場を設けるようになったのである。これには茶の流行も大きく関わっていて、幅の漢字の書が鑑賞されたようである。

かつて漢字の書は、かなと同様、手紙などの日常的なもので書かれていた。そのため、大字の漢字は、寺社などの題額や碑以外は書かれていなかったようだが、鎌倉時代から禅宗による墨跡や茶が盛んになるにつれて、漢字が幅に大字で書かれるようになった。

一方、かなの書はまだ大字で書かれていない。この頃は、平安の古筆を尊重し、茶の流行と発展とともに、古筆を鑑賞することが盛んに行われるようになったようである。

このように、室町時代では、漢字の書に大字がみられるようになった。しかし、かなにおいては、まだみられない。

●安土桃山時代の書

安土桃山時代は、大字かなを生んだ革新的な時代である。この時代の背景といえば、戦国争乱のなかで、分裂から全国統一へとという大きな動きのある時代である。また、貿易が一層盛んになり、商業や農業など社会に様々な発展を遂げた時代でもある。とにかく激しい動きのあった時代であるが、大字かなはそのような背景のなかで、近衛信尹によって生まれたわけである。

まず近衛信尹についてであるが、信尹は、従一位関白太政大臣、近衛前久（一五三六—一六一二）の子で、三藐院と号した。本阿弥光悦・松花堂昭乗とともに、寛永の三筆の一人で、能書家として知られる。

この近衛信尹が生きた安土桃山時代は、大きく豪華なものを好み、建築も大き

なものが建てられた。その一つである安土城は、一五七九年、織田信長（一五三四—一五八二）の命により建てられ、世界で最初の木造高層建築といわれた。高さ約四十六メートルの壮大で絢爛豪華な様であったと言われている。このように、大きな建築が建てられ、大きなものが好まれたとともに、屏風も、豪華で大きなものが好まれた。この時代の屏風は、絵を含め多く残されているが、その安土城には、狩野永徳の障屏画が飾られ、織田信長はこれを鑑賞したようだ。この狩野永徳の屏風は「檜図屏風」「唐獅子図屏風」などがあり、屏風全面に絵が施され、非常に豪華なものである。

さて、近衛信尹が書いた屏風は、図一の「いろは屏風」、図二の「和歌屏風」、他には「六義屏風」「歌仙屏風」などがある。

近衛信尹の屏風は、従来の屏風のように色紙形に書写するのではなく、直接屏風に書写されている。

このように非常に力強い書を書くことができたのは、信尹の歩んできた過酷な生涯の中で培われた性格と、その教養とが、この大字かなを生んだのだろうか。また、大きく豪華なものを好んだ時代背景とが、重なり合った故であろうか。

こうして、信尹は初めて大字かなを書いたと伝えられているわけである。

その後、信尹の書風は、一つの流儀となつて近衛流、または三藐院流として引き継がれていったが、このような大字かなは、近現代になるまで登場しないようである。

●明治の書

明治になると、江戸時代からの流儀書道がなおも残っているなかで、上代の古筆に注目する動きが起されたようである。それは、難波津会の結成によって、上代様復興が起ったことによるようだ。

この難波津会は、明治三年（一八九〇）に創設された。三条実美（一八三七—一八九二）、東久世通禧（一八三三—一九二二）、田中光顕（一八四三—一九三九）、

高崎正風（一八三六—一九二二）らが発起人となり、小杉楳邨（一八三四—一九一〇）、大口鯛二（一八六四—一九二〇）、阪正臣（一八五五—一九三一）らが会員となり、当時あまりみることができない御物、宮家旧大名家に秘蔵されていた平安時代の貴重資料を閲覧し、古筆の研究をした会である。この会の発足によって、古筆の研究が進められ、新しく明治のかな書道が発展していったようだ。

その後、この会は解散してしまうのであるが、多田親愛（一八四〇—一九〇五）や小野我堂（一八六二—一九二二）、岡山高陰（一八六六—一九四五）、中村春堂（一八六八—一九六〇）、尾上柴舟（一八七六—一九五七）、神郡晩秋（一八八八—一九五五）、鈴木翠軒（一八八九—一九七六）らによって受け継がれていったようだ。そして、古筆研究の基礎が固められていき、古筆の複製が刊行されていくにつれて、大正、昭和へのかな書道の基礎が整えられたようだ。

田中親美（一八七五—一九七五）が、古筆の複製によって上代様の勃興に多大な影響を与えた人物であることは、今日に知られている。

そして、大字かなは、近衛信尹以来、これらの人々によって書き始められるようになるのであった。

では、その後、大字かなはどのように発展していくのか。

●近現代の書

近現代になり、戦後の書は再構築されて、展覧会が盛んに行われるようになった。日展には昭和二十三年に第五科として書が増設され、それら展覧会をきっかけにして、大字かなの必要性を覚えるようになったようだ。そして、大字かな運動が起されたのであった。

大字かな運動とは、昭和三十年頃、安東聖空（一八九三—一九八三）、田中塊堂（一八九六—一九七六）、内田鶴雲（一八九八—一九七八）、谷辺橋南（一九〇五—一九八〇）、日比野五鳳（一九〇一—一九八五）、桑田笹舟（一九〇〇—一九八九）、宮本竹逕（一九二二—二〇〇二）の七人の諸先生方によって行われた、

かなを大きく書こうという運動のことである。

この運動を期に、平安朝の古筆研究を基礎として、大字かなの研究が進められていったようである。

そして、大字かな運動が行われたことによって、大字かなは盛んになり、現在のかな書道に必要不可欠なものとなったと言える。

第二章 大字かなの必然的要因について

大字かなが書かれるようになるのは、展覧会場の広い空間の壁面に、細字を展示するよりも大字を展示した方がよいというような会場構成の問題や、かなの人口を増やすことなど、日展に第五科書が増設されて展覧会が活発になると同時に、大字かなを書いていく必要性が起ったためと考えられる。

大字かなを發展させた大字かな運動については、前章で少し触れたことであるが、この章では、大字かな運動を起すその要因について、具体的に考察してみることとする。

まず、大字かなそのものがなぜ必要になったのか、田宮文平氏は、このように述べている。

なぜ、この運動がおきたかについては、それに先行する書（壇）の状況を考えてみなければならぬ。マクロに見れば、床の間に象徴される和風空間から、第二次世界大戦の破壊を経て、生活空間が刻々と洋風化したことが指摘できるであろう。一方、ミクロに考えれば、昭和戦後期の展覧会制度、なかんずく、その中心となった日展、毎日展の状況と関連がある。（墨スペシヤル かな書道の百年—その変遷と展望—より）

とある。戦後の生活空間の変化と、展覧会の机上芸術から壁面芸術への必要性を

感じたため、かなも壁面に展示する必要が出てきたようだ。

しかし、なぜ大字でなければならなかったのか、それは、次に挙げる宮本竹逕氏の言葉にある。

「『本書法集成 宮本竹逕書法』より」

「本書法集成 宮本竹逕書法」より）

「大仮名を書かねばならない」と思ったのも当然であります。（『現代日

私を、悩みのどん底につき落とししまったのであります。「大仮名を書こ

れでよいのだろうか」と考えるであります。今まで小字ばかり書いていた

大字を、小さい額に収めてその間々に掲げてある。それを見た時、誰しもそ

の壁面は、この小さな仮名を並べて果たしてよいものだろうか。漢字作家が、

大字を大きな額に仕立てて、所狭きまでに並べてある会場に、仮名は、小

さい字を、小さい額に収めてその間々に掲げてある。それを見た時、誰しもそ

れでよいのだろうか」と考えるであります。今まで小字ばかり書いていた

私を、悩みのどん底につき落とししまったのであります。「大仮名を書こ

う」「大仮名を書かねばならない」と思ったのも当然であります。（『現代日

本書法集成 宮本竹逕書法』より）

この言葉からわかるように、展示会が壁面芸術を必要とし、かなも壁面芸術に

発展させようとした時、漢字と共に壁面に並べることの難しさを覚えたことが、

大字のかなを書くことを感じさせたようである。

漢字は、力強く文字も大きな作品が多数である。そのような漢字作品と一緒に、

繊細で、文字も小さい細字かな作品を展示したら、その違いを覚えるのは自然で

ある。そして、そのつりあいは難しく、大字かなの必要を感じさせる要因とな

ったようである。

また、大字かな運動を必要としたもう一つの理由として、桑田笹舟氏はこのよ

うに述べている。

「『本書法集成 宮本竹逕書法』より」

「本書法集成 宮本竹逕書法」より）

「大仮名を書かねばならない」と思ったのも当然であります。（『現代日

私を、悩みのどん底につき落とししまったのであります。「大仮名を書こ

れでよいのだろうか」と考えるであります。今まで小字ばかり書いていた

大字を、小さい額に収めてその間々に掲げてある。それを見た時、誰しもそ

の壁面は、この小さな仮名を並べて果たしてよいものだろうか。漢字作家が、

大字を大きな額に仕立てて、所狭きまでに並べてある会場に、仮名は、小

さい字を、小さい額に収めてその間々に掲げてある。それを見た時、誰しもそ

れでよいのだろうか」と考えるであります。今まで小字ばかり書いていた

私を、悩みのどん底につき落とししまったのであります。「大仮名を書こ

う」「大仮名を書かねばならない」と思ったのも当然であります。（『現代日

本書法集成 宮本竹逕書法』より）

「『本書法集成 宮本竹逕書法』より」

「本書法集成 宮本竹逕書法」より）

「大仮名を書かねばならない」と思ったのも当然であります。（『現代日

私を、悩みのどん底につき落とししまったのであります。「大仮名を書こ

れでよいのだろうか」と考えるであります。今まで小字ばかり書いていた

大字を、小さい額に収めてその間々に掲げてある。それを見た時、誰しもそ

の壁面は、この小さな仮名を並べて果たしてよいものだろうか。漢字作家が、

大字を大きな額に仕立てて、所狭きまでに並べてある会場に、仮名は、小

さい字を、小さい額に収めてその間々に掲げてある。それを見た時、誰しもそ

れでよいのだろうか」と考えるであります。今まで小字ばかり書いていた

私を、悩みのどん底につき落とししまったのであります。「大仮名を書こ

う」「大仮名を書かねばならない」と思ったのも当然であります。（『現代日

本書法集成 宮本竹逕書法』より）

「『本書法集成 宮本竹逕書法』より」

「本書法集成 宮本竹逕書法」より）

「大仮名を書かねばならない」と思ったのも当然であります。（『現代日

私を、悩みのどん底につき落とししまったのであります。「大仮名を書こ

れでよいのだろうか」と考えるであります。今まで小字ばかり書いていた

大字を、小さい額に収めてその間々に掲げてある。それを見た時、誰しもそ

の壁面は、この小さな仮名を並べて果たしてよいものだろうか。漢字作家が、

大字を大きな額に仕立てて、所狭きまでに並べてある会場に、仮名は、小

さい字を、小さい額に収めてその間々に掲げてある。それを見た時、誰しもそ

れでよいのだろうか」と考えるであります。今まで小字ばかり書いていた

私を、悩みのどん底につき落とししまったのであります。「大仮名を書こ

う」「大仮名を書かねばならない」と思ったのも当然であります。（『現代日

本書法集成 宮本竹逕書法』より）

「『本書法集成 宮本竹逕書法』より」

「本書法集成 宮本竹逕書法」より）

「大仮名を書かねばならない」と思ったのも当然であります。（『現代日

私を、悩みのどん底につき落とししまったのであります。「大仮名を書こ

れでよいのだろうか」と考えるであります。今まで小字ばかり書いていた

大字を、小さい額に収めてその間々に掲げてある。それを見た時、誰しもそ

の壁面は、この小さな仮名を並べて果たしてよいものだろうか。漢字作家が、

大字を大きな額に仕立てて、所狭きまでに並べてある会場に、仮名は、小

さい字を、小さい額に収めてその間々に掲げてある。それを見た時、誰しもそ

れでよいのだろうか」と考えるであります。今まで小字ばかり書いていた

私を、悩みのどん底につき落とししまったのであります。「大仮名を書こ

う」「大仮名を書かねばならない」と思ったのも当然であります。（『現代日

本書法集成 宮本竹逕書法』より）

「『本書法集成 宮本竹逕書法』より」

「本書法集成 宮本竹逕書法」より）

「大仮名を書かねばならない」と思ったのも当然であります。（『現代日

私を、悩みのどん底につき落とししまったのであります。「大仮名を書こ

れでよいのだろうか」と考えるであります。今まで小字ばかり書いていた

大字を、小さい額に収めてその間々に掲げてある。それを見た時、誰しもそ

の壁面は、この小さな仮名を並べて果たしてよいものだろうか。漢字作家が、

大字を大きな額に仕立てて、所狭きまでに並べてある会場に、仮名は、小

さい字を、小さい額に収めてその間々に掲げてある。それを見た時、誰しもそ

れでよいのだろうか」と考えるであります。今まで小字ばかり書いていた

私を、悩みのどん底につき落とししまったのであります。「大仮名を書こ

う」「大仮名を書かねばならない」と思ったのも当然であります。（『現代日

本書法集成 宮本竹逕書法』より）

「『本書法集成 宮本竹逕書法』より」

「本書法集成 宮本竹逕書法」より）

「大仮名を書かねばならない」と思ったのも当然であります。（『現代日

私を、悩みのどん底につき落とししまったのであります。「大仮名を書こ

れでよいのだろうか」と考えるであります。今まで小字ばかり書いていた

大字を、小さい額に収めてその間々に掲げてある。それを見た時、誰しもそ

の壁面は、この小さな仮名を並べて果たしてよいものだろうか。漢字作家が、

大字を大きな額に仕立てて、所狭きまでに並べてある会場に、仮名は、小

さい字を、小さい額に収めてその間々に掲げてある。それを見た時、誰しもそ

れでよいのだろうか」と考えるであります。今まで小字ばかり書いていた

私を、悩みのどん底につき落とししまったのであります。「大仮名を書こ

う」「大仮名を書かねばならない」と思ったのも当然であります。（『現代日

本書法集成 宮本竹逕書法』より）

より)

この大字かな運動が、今後の展覧会や大字かなにとってどれほど重要なことであるか、この文で知ることができる。

では大字かな運動の結果、どのような変化がみられたのか。それは、現在の展覧会の作品状況が証していることであるが、その直後の変化としては、急激に大字かな作品が増加していることから知ることができる。

宮本竹逕氏は、

大字仮名の問題であるが、昨年は一昨年に対して、二十四点という大量進出を見たのであり、関西の指導的立場の人々は挙って大字仮名を奨励しているので、今年あたりは、量は申すまでもなく、質的にも大いに向上するものと非常な期待を持っている。(『書芸公論』昭和三十三年十二月より)

と述べている。また、その後の昭和三十五年第3回日展の審査所感として、『書品』にこのように書いている。

九十五点の入選中、大字五一、中字二、小字四二となって居る。大字は以前に比し、量も多くなったが、質も大分向上したようだ。(『書品』昭和三十五年十二月より)

この文章を見る限り、大字かなは着々と増え、大字かな運動が成功したことを窺うことができる。

その後、大字かなを書く人は増えていったが、その方法論について模索されていき、現在に至るようである。

この大字かな運動は、かな書道の歴史を動かす重要な役割をしたと言えるであ

ろう。

その大字かな運動から約五十年経った今、これからの大字かなは一体どのような方向へと行くのだろうか。

第三章 現代かな作家に問う、大字かなについて——アンケート調査結果——

〈現在活躍されているかな作家二十一名の先生方にお聞きした、

大字かなについて〉

大字かなは、大字かな運動をきっかけにして展覧会に定着していった。現在では盛んに書かれるようになったが、本来かなは細字にその美が発揮される、というような意見もある中、現在活躍されているかな作家の先生方は、大字かなそのものをどのようにお考えであるのか。現在活躍されている若手かな作家の先生方に、大字かなについてのアンケートを取らせていただいた。

アンケートの質問と答えをここに載せさせていただく。尚、先生方のお名前は公開せず、イニシャルで表示させていただくことにした。

Q1、大字かなをどう思われますか。

A、好き…十八名

普通…三名

- ・現代という時代にふさわしい表現の形。……………(T先生)
- ・いたずらに作品の大きさ(面積)や白に対立する黒という観点からの大字かな制作は誤り。かなは大字とて、墨色を考えるべき。……………(M先生)
- ・細字に比べて躍動感あふれるダイナミックな表現ができる。……………(M先生)
- ・壁面芸術として欠かせない表現。……………(H先生)

Q2、かなの魅力は、細字と大字のどちらに感じられると思われませんか。

A、大字にも細字にも感じられると答えられた先生方…十九名

・大字かなにも細字にも魅力を感じるが、大字はあくまでも小字的資質を失わないこと。……………(Y先生)

・大字にはダイナミックな生命力が盛り込める。細字には日本人独自の感性を盛り込める。……………(T先生)

・小字を学習した上での大字制作でなければかな美の根本は存在しない。また、漢字学習(大筆による諸々古典学習)抜きでは、真の大字かな作品はあり得ないと思う。……………(M先生)

・大字に迫力、小字に優美さを。……………(N先生)

・仮名の魅力とは何かということになるが、大字には大字の、細字には細字かなの魅力を作り、盛り込もうとしているのだから。……………(K先生)

・古筆は細字なので、広く歴史的な重みはある。……………(A先生)

・大字の勉強が細字に生かされ、また細字の勉強が大字に生かされるように思う。……………(T先生)

・時空を超えてある仮名の書の美しい要素を内包したものであれば、双方同じように魅力を感じる。……………(H先生)

・細字は連綿遊系で、心の琴線に触れる線表現を。大字は対称的に、単純化した極限の世界を表現すべき。……………(K先生)

・大字には、まだ未完成の部分が多く、工夫するところが多いので、いろいろやってみて、後の人の材料になればと思う。……………(Y先生)

・細字がまず第一で、大字は現在の壁面芸術としては面白い。……………(I先生)

Q3、読める書、「調和体」の提唱によって、読みやすい作品が多くみられますが、かなと調和体との境界はどこにあると思われませんか。

A、ただ読みやすければ良いというのではなく、長く深い古典の学習によって培われた漢字の造形性、かなの情緒性が自然の運筆の中で展開するものでなくてはならないと思う。……………(F先生)

・時代(場面)にあると思う。平安のものは、平安時代に調和していたと思う。……………(Y先生)

・特に境界は設けなくてよいが、あえていうならば変体かなの使用の不可。……………(Y先生)

・かな作品の難解さは変体かなの多用や、連綿による極端な文字のデフォルメにあると思う。その点を踏まえ、かなの持つ空間美、余白を生かした造形等、芸術性豊かな表現は調和体作品にも大いに生かせると思う。……………(Y先生)

・調和体ということを意識したことはない。あくまで読みやすいかな作品として読める書を提唱すべき。……………(T先生)

・調和体についてはいろいろ制約がなされているが、その中でも「連綿は二字まで」という法には抵抗がある。三字連綿にしても、それが自然である類は多くある。古典美の原理をもっと汲み取った考えが必要だと思う。……………(M先生)

・変体かな使用、連綿相の規定。……………(T先生)

・変体かなの使用。……………(T先生)

・漢字における草書、かなの変体かなの使用不可。……………(K先生)

・かなは平安時代から調和体だと思っている。読める書とは草書、変体かなを使用しないものだろうか。……………(A先生)

・草書・連綿・変体かなは使わない。……………(N先生)

・草かな・変体かなを使用するかどうかわからないだろうか。漢字(楷・行・草)とかなどの調和と言うことではないだろうか。……………(K先生)

- ・かなは書く人の感情とか思想・調和その他いろいろな心の動きを書に表すもの。
 - ・調和体は、文字を相手に伝え、尚芸術性を表そうとするもの。……………(I先生)
 - ・調和体は、変体かなを使わない、漢字の草書体を避ける、多字連綿を避けること、以上の条件を踏まえていることと考えている。……………(I先生)
 - ・かなは変体かな、草書使用可。……………(I先生)
 - ・現在実用としてほとんど使用されていない変体かなや草書を使用しないで、各自の考える書表現(美的)であれば良いと思う。表現としての境界はないと思う。……………(M先生)
 - ・かなは、連綿による字形の変化が出せる。調和体は、二字以上は連綿しないので単純な美しさ。……………(A先生)
 - ・公募展は別として、究極のところは、漢字、かな、調和体というジャンルの境界は、「書」において必要ない気がする。……………(T先生)
 - ・義務教育を修了した人が読める表現なら調和体。かなが読みにくい理由は、草かなの使用と連綿線にあると思う。……………(H先生)
 - ・かな書は元来、仮名と和様漢字の調和体である。現在言われる、読める書と調和体はイコールではなく、現代文(読める文句)の書表現と考える。……………(W先生)
 - ・和歌・俳句と詩文との題材の区分。変体かな使用か否か。字形、連綿、放ち、情緒の違いなど。……………(K先生)
- 田宮氏は、「かなと調和体との間には、常にグレーゾーンが存在する。」と述べている。かな作家は、もともと和歌などの国文体を扱っているからである。私は、この田宮氏の言葉を読み、かな書家の先生方は、どのように考えておられるのだろうかと思ひ、お聞きした。
- 多くの先生が、かなは変体かな、草書を使用してもよい。調和体は、変体かな、草書、連綿を使わない。というお答えでした。また、何人かの先生からは、境界はないというご意見をいただいた。

- Q4、今後、どのような大字かなの作品を制作しようと考えておられますか。
- A、技巧的になりすぎないように、複雑な文字を多用しすぎないように、書の本質を取り違えないように、心掛けたと思う。……………(F先生)
- ・大字かなの一般社会におけるポジションの問題、どのような場に大字かなは扱われるのか。……………(Y先生)
 - ・かなにおける様々な字体はともかく、古意豊かかな特有の資質を大切にしたい。……………(Y先生)
 - ・仮名特有の余白美、白の冴えた作品を目指したく思っている。また、壁面芸術として、紙面の立体化や、独自のリズムを有する強い表現をと願っている。……………(Y先生)
 - ・文字が見えてこない、抽象絵画のような品のある大字かな作品を書きたい。……………(T先生)
 - ・模索に模索を重ねている。あえて言うならば、小字の美しさの原理(デリカシー)は、大字になっても残存するような方向の書作が理想。……………(M先生)
 - ・連綿体での流れ、仮名本来の持つ流動美。……………(T先生)
 - ・白(余白)をどのように活かすかを追い求めたいと思っている。……………(K先生)
 - ・古典を大切にすることもだけを追求する。……………(A先生)
 - ・力強い新しいかな。……………(N先生)
 - ・かな・調和体と区別することは本来必要ないだろう。これらを包含するものでありたい。……………(K先生)
 - ・古典をさらに追求しながらそれを破り離れ、新鮮味のあるものを表現したい。……………(I先生)
 - ・大きな紙面を使える利点を生かして、自由な発想のもとでの作品制作が可能。素材を和歌・俳句とかのジャンルにこだわることなく広い分野にも求めて、斬新な作風を生み出したい。……………(I先生)

- ・見ごたえのある線と空間の白さの美しい作品を書きたい。……………(I先生)
- ・躍動感のある素朴な味わいを感じる作品。……………(M先生)
- ・大きい会場での屏風等に散らし書きでない作品。……………(A先生)
- ・まだまだ暗中模索中。いたるところにアンテナを張りめぐらしてヒントを得ながら、目に見えない心の佛様を見つけれられるように筆を持ちつづけたい。……………(T先生)
- ・書の究極は線と思うので、第一はより練度の高い線質となるように鍛えること。細字の拡大が大字でないことは明白。複雑形を加味した制作を目指すことになると考えている。……………(H先生)
- ・文字(漢字・仮名)は、書を表現する素材(媒体)と考える。その文字・言葉・文章・詩歌をより壁面作品としたものが大字作品であると考える。……………(W先生)
- ・二十一世紀に合う書。「かな」のみでなく、総合の美術としての表現をしたい。……………(K先生)

へかな作家が選んだ「大字かな作品」

日比野五鳳

- ・『いろは歌』…九名
 - ・『流水』…二名
 - ・『古池』…二名
 - ・『うぐひす』
 - ・『柿の木』
- 杉岡華郁
- ・『玉藻』
 - ・『最上川』
- 深山龍洞
- ・『万葉歌』 昭和三十六年(一九六一) 第四回日展菊花賞の作品…二名

岡田秋翠の作品

桑田三舟

・『雪月花』

千代倉桜舟の作品

最後に、これまでの大字かな作品で好きな作品は、と質問したところ、日比野五鳳の『いろは歌』が最も多かった。他には先に記した作品が挙げられていたので、紹介させていただいた。

これらの作品を資料に載せさせていただいたが、桑田三舟と千代倉桜舟の作品を見つけることができなかったため、載せることができなかった。

(文中敬称省略)

以上、アンケート調査の結果を紹介させていただいたが、このアンケートを受けて、これからの大字かなの行方を探ってみたいと思う。

まず、このアンケートの中で、先生方の意見に共通する部分があるので、ここに挙げてみることにする。

Q1の共通点…大字かなは、現代にふさわしく、壁面芸術として欠かせない表現である。

Q2の共通点…大字かなには、細字にはない迫力を表現することができる。細字が第一であり、まず細字、古典を学習すべき。

Q3の共通点…調和体との境界は、変体かなの使用、草かなの使用、多字数の連綿の使用が可か否か。

かなは、平安よりかなと和様漢字の調和体。
文字の表現として、またジャンルとしての境界はない。

Q4の共通点…かな特有のものを大切に。
連綿による流動美の、かな特有の美しさを大字に表現する。

仮名の空間（余白）の美しさ。

質問ごとにかけてその中で共通する点をここに挙げたが、全体を通しての共通部分は、古典を大切にするということであつた。

大字かな作品を制作するにあたって、まず何よりも細字の学習が根底にあるべきで、最も重要なことであると、アンケートによって教えられる。

そして、大字のみに表現できる勢いや個性がそこに加わることで、新しい大字かなが生み出されていくだろう。

また、このアンケートの共通点をみると、やはり古典を土台とし、かな独自が持っている流動美、連綿の美しさや、かなにしか表現できない余白の美を、大字かな作品に表現して、今後の作品を制作していくという意見が多いようだ。

従つて、今後の作品もかな古典を土台とし、それぞれに表現されていくことが、一つの作品の傾向であろう。

また、かな作品でも、読みやすいということ意識して、かな作品としての読みやすい大字かなを書くこと、そしてもう一つはそれに相反して、古筆にあるような流動美の複雑形の書を書いていく、ということである。この二つはまったく異なる表現であるが、今後、この二通りの作品も展開されていくだろう。

よつて、今後の大字かなは、大字の中になかなかない美しさ、古典の美しさを表現することが土台となり、その上に、かな作家一人一人の価値観、感性、個性が加味されて表現されていくのではないかと考える次第である。

◇今回のアンケートに御協力いただいた先生方（五十音順）

秋田素鳳先生 浅井機山先生 井川悠香先生 池田桂鳳先生
井茂圭洞先生 黒田賢一先生 慶徳紀子先生 小林章郎先生

高木厚人先生 田頭一舟先生 谷本素洲先生 土橋靖子先生
中室水穂先生 畑林畊陽先生 藤木正次先生 前島泉洲先生
三宅相舟先生 山本高邨先生 横山煌平先生 吉川美恵子先生
渡邊笙鶴先生

おわりに

かなは本来細字であるため、そのかなを大字にしたら、かなの美しさを表現することができないのではないだろうか、という意見をお持ちの方もおられるかもしれない。しかし、第一章でも時代ごとの書を見てきたように、これまで書は、時代背景をいつの時代にも受けて、それが書に影響しながら今日に及ぶようである。大字かなもその一つで、時代背景を受けて、かなが大字で書かれるようになるのであるから、アンケートの中でも何名かの先生がおっしゃっていたように、大字かなは現代にふさわしい表現の方法なのではないか。

大字かなは、現代の書表現として古典を基に、今後も更なる展開が成されていくこととなるだろう。

◇付記

今回、この研究ノートを作成するにあたって、アンケートという形で、諸先生方から多大なるご協力を賜った。最後になったが、厚く御礼を申し上げる次第である。

―参考文献―

・墨『現代のかな表現』芸術新聞社 (二〇〇〇年二月一日)
・開館四〇周年記念特別展『国宝 源氏物語絵巻』五島美術館

(二〇〇〇年十一月三日)

- ・第六〇〇回記念特別展『平安の書之美』書芸文化院 (二〇〇〇年二月二五日)
- ・『古筆に親しむ』杉岡華邨著 淡交社 (一九九六年五月二日)
- ・墨スペシャル『かな書道の百年―その変遷と展望―』芸術新聞社 (一九九五年四月五日)
- ・墨スペシャル『現代の書 半世紀の歩みと展望』芸術新聞社 (一九九二年一月五日)
- ・『仮名百話』春名好重著 淡交社 (一九八五年一〇月一二日)
- ・墨『近代日本の書』芸術新聞社 (一九八一年二月一〇日)
- ・『かな古筆美の研究総論 ほんとうのかな』安東聖空著 同朋舎出版 (一九八六年五月十七日)
- ・『現代日本書法集成 宮本竹逕書法』宮本竹逕著 尚学図書 (一九七七年三月二五日)
- ・『書品』第七十五号 東洋書道協会 (一九五六年十二月十五日)
- ・『書品』第九十五号 東洋書道協会 (一九五八年十二月十五日)
- ・『書品』第一一九号 東洋書道協会 (一九六〇年十二月十五日)
- ・『書芸公論』昭和三十三年十二月 (一九五八年十二月)

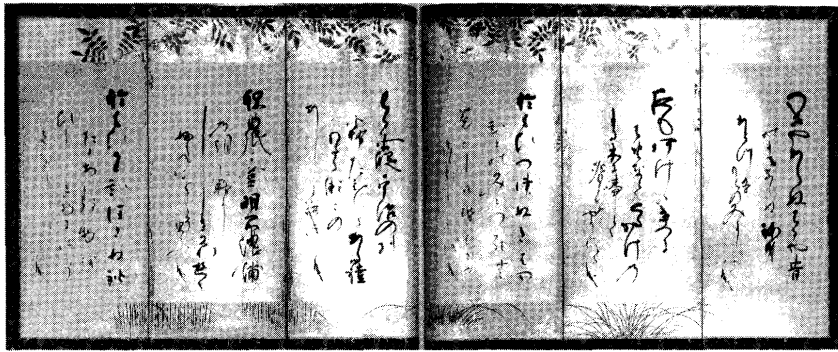
図一 近衛信尹

「いろは歌屏風」(六曲一双部分) 禅林寺所蔵



図二 近衛信尹

「和歌屏風」(六曲一双) 東京国立博物館蔵



〈かな作家が選んだ大字かな作品〉

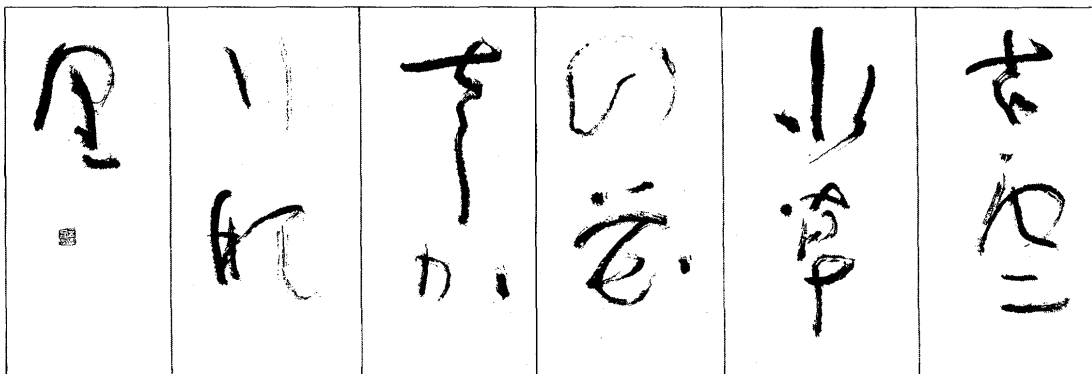
日比野五鳳「いろは歌」(一九六三)



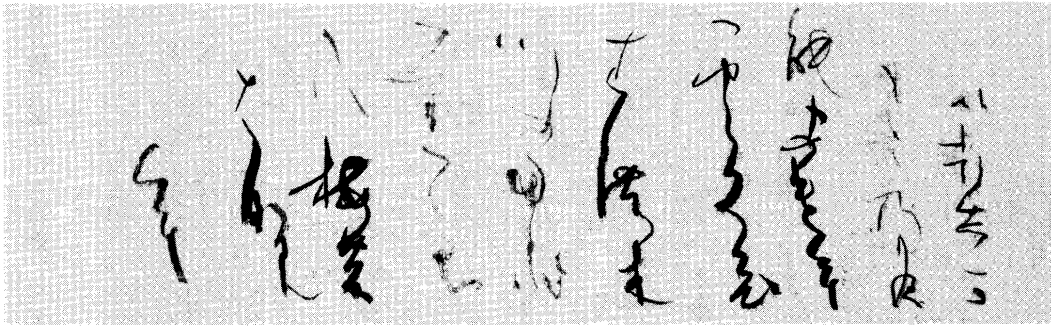
「流水」(一九八五)



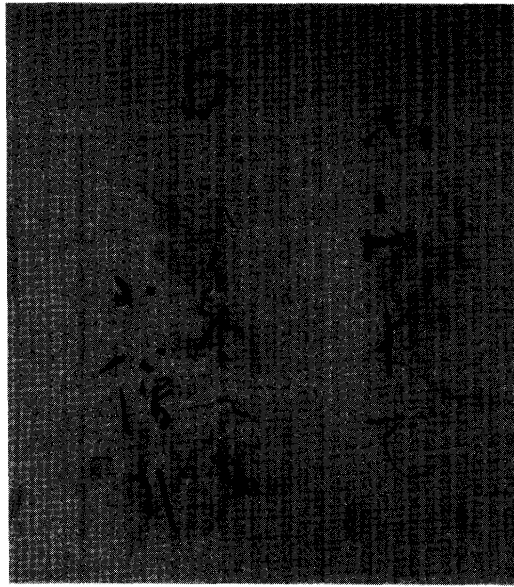
「古池」(一九八二)



「うぐひす」(一九六五)



「柿の木」(一九八二)



杉岡華邨 「玉藻」(一九八二)

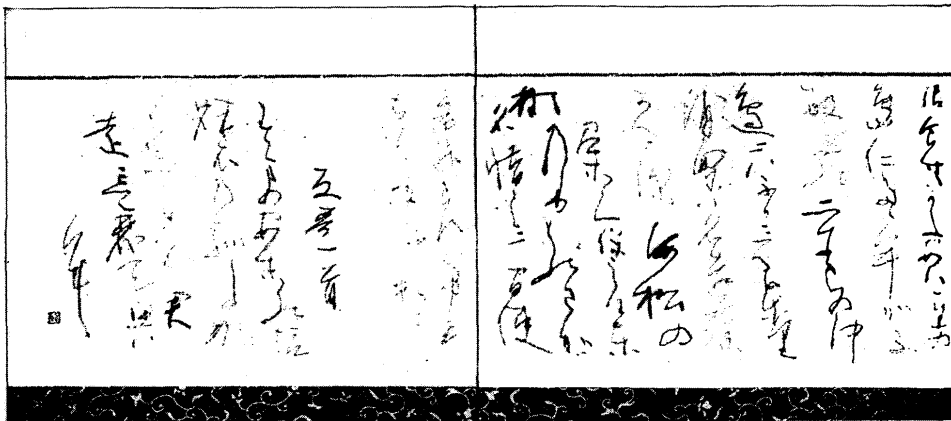


「最上川」(一九九八)



深山龍洞「万葉集」(一九六一)

第四回日展菊花賞



岡田秋翠

第十回日展特選(一九六八)

